

『権力とたたかう良心』

2020年01月30日

宗教改革者ジャン・カルヴァンの絶対的権力に立ち向かったセバスチャン・カステリオンの闘いを描いたステファン・ツヴァイクの『権力とたたかう良心』を、初めて読んだ時の衝撃は忘れられない。カルヴァンはプロテスタント神学の教科書とも言うべき『キリスト教綱要』を著し、カルヴァンの聖書注解から学ばない牧師はいないだろう。プロテスタント教会の骨格を形成した神学者、牧師であった。今回読み直し、カルヴァンの異常な偏狭さに驚き、彼の絶対的権力に反抗したカステリオンの信仰的良心に心打たれた。

カルヴァンはフランスから国外逃亡をし、1536年にジュネーブに来て、神学講義を始め、市民から受け入れられ、絶対的な権力を掌握していった。カルヴァンの意に沿わない人を「主の晩餐」に列なることを許さず、市民から除け者にし、全ての官庁と職種、市当局と宗教評議会、大学、裁判所、財政、監獄に至るまで、彼の絶対権力に従属させた。「私は私の教えることを神からうけついでいる。私の良心がそのことを保証する」と豪語している。彼は人間としての喜びや楽しみを捨て去り、3~4時間の睡眠しか取らず、真面目に聖書、神学を研究し、市の行政の細部にまで関わった。自由で陽気な笑い声は無くなり、死んだような静寂の街と化した。カルヴァンの教義、意向に反する者は拷問を受け、市外追放、処刑された。誰も反抗できない恐怖政治を司る独裁者になっていった。

カルヴァンを頼ってカステリオンがジュネーブに来る。彼は優秀な学徒で、宗教改革で学んだ自由を生きようとする神学を目指していた。カルヴァンはカステリオンの優秀さを認めながら、自由を渴望する姿勢に自分に追従しなくなる危険を感じ、つまらない理由でジュネーブを追い出す。カステリオンは職を失い、貧困の中でも誠実な勉学を続けていく。

スペイン出身の青年ミゲル・セルヴェートが宗教改革を更に進めると、「三位一体」の教義を否定する論述を展開し、異端論争が吹き荒れる。セルヴェートはジュネーブに来て、捕らえられ、過酷な裁判を受け、最悪の獄中生活を強いられる。カルヴァンは市政を動かし、冷徹に彼を焚刑に追い込んでいく。セルヴェートは裁判において、自分の神学を1インチも譲らないと証言し、伝統的な教義には反対したが、純粋な信仰を守り抜いている。焚殺刑の場合、先に絞殺、あるいは失神させられるのであるが、彼は生きながらに焼かれる刑を受けている。彼は「主よ、あわれみたまえ」と恐怖の中、甲高い祈りを捧げて死んでいった。この処刑が執行されている間、カルヴァンは自分の神経を衝撃から守るためか、窓を閉め切った書齋に座っていた。公然と目撃できなかったが、公正な行為であったと、次の日曜日、説教壇から自分の行為を称賛した。セルヴェートが焚殺させられた後、カルヴィンに対する批判が起ったが、批判する者を厳しく迫害した。

良心が権力に抵抗する声を湧き起こした。カルヴァンに追われたカステリオンは『わたしは弾劾する』を書いて、「真理を知っているのはわれわれだけであって、そのほかの意見はすべて間違いだ」という考えの高慢さを指摘した。裁判は、「ひとりの人間を殺すことは、けっして教義をまもることにはならない。それはあくまで人間を殺すことでしかない」と、カルヴァンを有罪とした。ところが、カルヴァンはカステリオンの出版を妨害し、権力の保持に成功する。二人の間で、激しい論争がなされるが、過労ですり減ったカステリオンは48歳の生涯を終える。カステリオンの信仰の自由を尊ぶ思想は人々の心に残り、墓石には「偉大な学識と清らかな生涯への感謝として」と彫られた。

著者ツヴァイクはユダヤ人で、カルヴァンを独裁者ヒトラーと重ねて、命を賭して闘ったカステリオンの信仰的良心を描き、「象とたたかう虻」と評している。